No.02 | 2026.11

未来へのバトン

私たちが受け継ぎ、そして引き渡していくものは

みなべＳＤＧｓ未来都市・広報誌 第２号（隔月発行予定）



「島ノ瀬ダム」写真提供：南紀用水土地改良区



米澤強さん

～ 紡ぐ記憶、馳せる想い ～

このコーナーでは、この町を「支えてきた」「支えている」「支えていく」方々に、
「未来へのバトン」～私たちが受け継ぎ、そして引き渡していくもの～というテーマでお話を伺います。
第２回目は、平成４年から南紀用水土地改良区に務められ、事務局長として活躍中の米澤強さんです。

「自身の勤続３４年の振返りと、南紀用水の歴史について話してくれますか。」

３４年も経っちゃいましたね。平成の時代は「おい、若いの」と、もてはやされ、何事にもがむしゃらに取組んできましたよ。令和の元号になり自分が「若いの頼むで」という立場になっちゃいましたね。そして、土地改良区では、若い世代が育っており、頼もしく思っています。

さて、南紀用水についてですが、昭和３０年代から水資源の有効活用を図る構想が出され、昭和４０年代に短期間の日照りでも用水が枯渇するこの地域の農業発展を目的に協議会が発足し、用水施設を建設するための国営事業化の調査が始まりました。当初は田辺市、南部町、南部川村そして上富田町にまたがる農地への用水事業として、昭和４８年度に着手されたんです。（ただ途中、配水効率の面など、見直しにより田辺市、みなべ町の１市１町となり、現在の農地およそ1,400haに送水しています。）

余談ですが、私、４９年２月生まれなので、南紀用水事業と同期になるんです（笑）

これらは、本誌の第１号で語られた林秀行氏ら、大先輩の皆さん方のご尽力があって、平成７年度に島ノ瀬ダムや山頂への貯水槽の建設が完成。また、ウメやみかん畑など、農地へ水を送るパイプラインなどの工事が県営事業によって平成１４年度に完成したんです。

当時、南紀用水土地改良区の初代理事長（平成２年～平成２２年）故安井治三郎氏の言葉に、この地域において世紀の大事業と称賛されていたのをよく覚えています。

「南紀用水ではどんな仕事をされているのですか。」

仕事の幅は広いですね。まずはある意味、水商売ですから、ダムの放流調節や農地に水を送るためにポンプなどを操作します。当然、これら施設の点検や修繕が欠かせませんし、敷地の草刈りも必要です。それにお金が必要ですから組合員からの賦課金徴収など会計経理の仕事から様々な事務仕事まで、尽きることがありません。まあ多忙なこと。

南紀用水土地改良区とは、農家を組合員として農業用水利施設を管理する組織です。土地改良区は、土地改良法（農業の生産向上などを目的として、農業生産基盤の整備、開発を図る法律）に基づき農業農村整備事業を行うための法人で、組合員（農家）の方々から徴収した組合費（賦課金）で農業用水を流すための水路やため池、揚水機などの管理を行う組織です。
（水土里ネット南紀用水ホームページより）

でも、思い返すと、この仕事に巡り合えて、感謝が一番にでてくるんです。誇りをもって仕事をしています。ほかの職員も同じ思いだと思います。といっても数名の小規模事業所なんですけどね。そして、オールマイティな仕事のおかげで、プライベートにおいても積極的になったり、メリットを受けていると思います。

「なるほどですね。最後に本誌のテーマ「未来へのバトン」ということで米澤さんの思いをお願いします。」

南紀用水も完成から３０年過ぎました。あちこち傷んでます。突然、水を送る心臓部ともいえる電動機の高圧電気設備が破損するなど、苦慮しているんです。そこで現在、国営施設の改修工事、ダムでは大雨・洪水による堆積土砂を取り出す工事など「国営南紀用水二期事業」令和９年度着工に取組んでるところです。組合員の力と国県市町の支援・協力、建設関係などの協力を得て、農業の変化・ニーズに対応する施設へ再編します。他にも県営事業では樹園地内にスプリンクラー施設を整備、防除労力の大幅軽減など、当時は画期的なものでしたが、時とともにそれが普通にあるものとなっています。これを無くしてしまうと大変なこと、老朽化した施設の保全に取組むとともに、ニーズを受けてスマート化（自動化）へも取組んでいきます。そして地域農業の発展、儲かる農業を展開し、次の世代達がみなべ町で暮らしたい、いや暮らせる町づくりに貢献したいと考えています。

土地改良区の組織においても「国営南紀用水二期事業」とともに歩む、次の世代が欲しいところ。

最後に碑（いしぶみ）を紹介させてください。ダム完成・国営事業完成・県営事業完成・土地改良区設立２０周年の節目に建てた石碑が４つあるんです。その４つ目の石碑は、初代理事長故安井治三郎氏の直筆で「希クハ（ねがわくは）利水悠久」が刻まれています。この言葉のとおり、南紀用水が果てしなく長く続くよう、大勢の力とともに私もまだまだ頑張らなね（笑）



「希クハ利水悠久」

米澤強さんにはご多忙の中、ご協力いただきありがとうございます。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

みなべ町が取組む SDGs（エス・ディー・ジーズ）

みなべ梅ラーニングコモンズの取組み紹介

みなべ SDGs 未来都市事業・梅ラーニングコモンズの８つグループのうち
4 グループの取組みを具体的にご紹介します。

未来デザイン



「みなべ SDGs 未来都市」の取組みや未来の姿を、町民の皆さんに分かりやすく伝える活動をしています。
令和 6 年度はキックオフイベントを開催し、多くの方とともに未来を考える第一歩を踏み出しました。
続く令和 7 年度は、町民の皆さんに手に取ってもらえるパンフレットの制作に注力しています。これまでにパンフレット作成会議を重ねたほか、町民フリーディスカッションや、各種団体と異論・反論を含め意見を交わす「はなきか（話を聞かせて！）」を実施。また、「UME1」でのブース出展では、大きな梅の木にたくさんの未来への願いを描いていただきました。



これからも一人ひとりの声を大切に、「みんなでつくるみなべのみらい」を実現していきます。

梅で健康・梅モグ



梅モグループは、近年、町民の食卓で梅が使われる機会が減少し、梅文化が次世代に十分に引き継がれていないという課題に対して、
1) うめを活用した健康促進、
2) 地域コミュニティの活性化を目標に活動しています。
1 年目は、①高城小学校の視察（梅ふりかけ）②町民アンケート③梅の効能に関する勉強会④滋賀の食文化研究会への視察を実施しました。
2 年目は、①若梅会との交流会②滋賀県視察③郷土料理交流会を実施しました。
3 年目は、町内小学生と保護者を対象に梅料理教室を開催しました。23 名の参加者と一緒に梅料理 5 品を作って、交流しました。
今年度も「知って、学んで、広げる」を活動指針に、取り組んでいます。



梅で健康・都市



梅・梅干しの健康機能やおいしさを都市部の人々に伝え、梅のファン、そしてみなべ町のファンを増やす活動に取り組んでいます。
令和 6 年度には、東京ミッドタウン八重洲で「和歌山みなべの梅パワーで元気になれる梅ナイト」を開催し、52 名が参加しました。梅の専門家による講演、梅料理の試食、梅シロップ作りキットの配布を通じて、参加者からは「梅の力に驚いた」「梅酢を使ってみたい」といった声が寄せられました。
令和 7 年度には、関西万博のジュニア SDGs キャンプで、延べ 105 名に向けて梅と SDGs を学ぶ体験イベントを実施しました。これからも、梅を通じて健康と交流を広げ、持続可能なみなべ町づくりにつなげます。



梅で健康・若者



若い世代の梅干し消費拡大と認知度向上を目指し、関西の大学や高校と連携した「域学連携事業」に力を入れています。これまでに武庫川女子大学、大阪キリスト教短期大学、阪南大学、立命館大学、京都産業大学の学生たちがみなべ町を訪れ、フィールドワークや合宿を実施しました。アジア圏への梅料理の紹介、アスリート向けの梅商品・ドリンクの考案、バイオ炭事業への支援など、若い感性を活かしたユニークな取り組みが次々と生まれています。また、南部高校の探究学習への支援も行い「SDGs QUEST みらい甲子園」でのファイナリスト選出につながるなど、次世代を担う若者たちとの大きなつながりが広がっています。





編集者がおすすめする 1 冊！
『梅料理のレシピ本とポストカード』
みなべ町役場では、梅料理のレシピ本 2 冊（うめ課）とポストカード（産業課）を、ご希望の方へ窓口で差し上げています。食卓に梅干しを欠かさない食文化をご家庭で実践することで、未来へつなげていきませんか。
役場ホームページからも「梅レシピ」でご覧いただけます。

発行：みなべ SDGs 未来都市事業「未来へのバトン作成グループ」　お問合せ：みなべ町総務課（0739-72-2015）